

冥王星をかすめた探査機

2015 年 7 月 20 日 05 時 00 分

太陽系の 8 人きょうだいは普通「水金地火木土天海」と順に並べられる。「木土天海地金火水」と並べることもできる。前者は太陽に近い順で、後者は大きさの順だ。どちらの末尾にも 9 年前までは「冥」の文字がついていた

▼一番遠くて、一番小さい惑星だった冥王星である。月より小粒な「末っ子」が格下げされて準惑星になったのは記憶に新しい。そのときの本紙社説の見出しは趣があった。「冥王星 地球は君を忘れない」。折しも米国の探査機が冥王星への旅に出たばかりだった

▼その「ニューホライズンズ」が、9 年半、48 億キロの旅をへて冥王星をかすめる最接近に成功した。送ってきた画像には、漆黒の空間を背に、氷でできた 3 千メートル級の山の連なりが写る。人類が初めて目にする荒々しい素顔だ

▼探査機は、冥王星を発見した米国の天文学者クライド・トンボーの遺灰も載せている。米国人が見つけた唯一の惑星とあって、米の学者は国際会議で格下げに反対した。三つの小ぶりの星を加えて 12 人きょうだいに増やす案も登場するなど白熱した

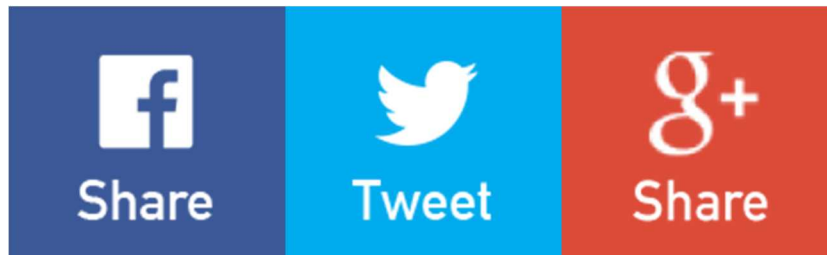
▼降格という処遇ゆえに話題性は増し、「君を忘れない」の長途の旅がロマンと感傷をかきたてる。探査機はそのまま飛行を続け、太陽系のいわば「村はずれ」である外縁の天体を観測するという

▼任務を終えた後は、人類のメッセージを携えて太陽系から遠ざかっていく。故郷の青い惑星に高度な文明がある。その証しである。地球をむさぼり、痛める文明でありたくはない。

2015 年 7 月 20 日 朝日朝刊「天声人語」より。

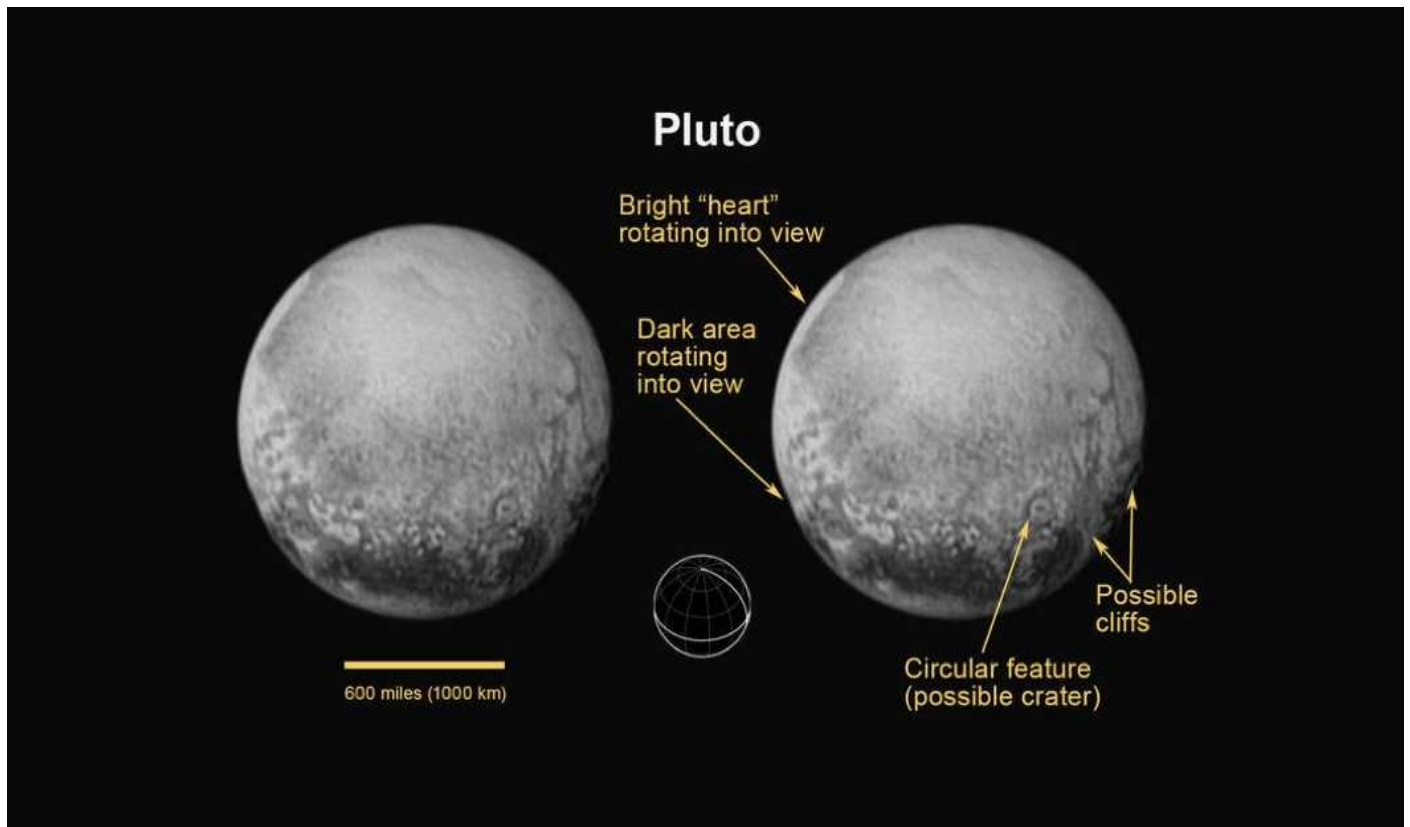
END

NASA の探索機が 9 年半かけて「冥王星」に到達。
その写真に写っていたのは・・・？



2015年7月14日、NASAの惑星探査機「ニューホライズン」が冥王星へとたどり着いた。地球からの距離はおよそ48億km。途方もない距離だが、探査機は2006年の1月に惑星の大気成分や地表の様子を観測するために発射されたもので、9年半かかって到着したことになる。

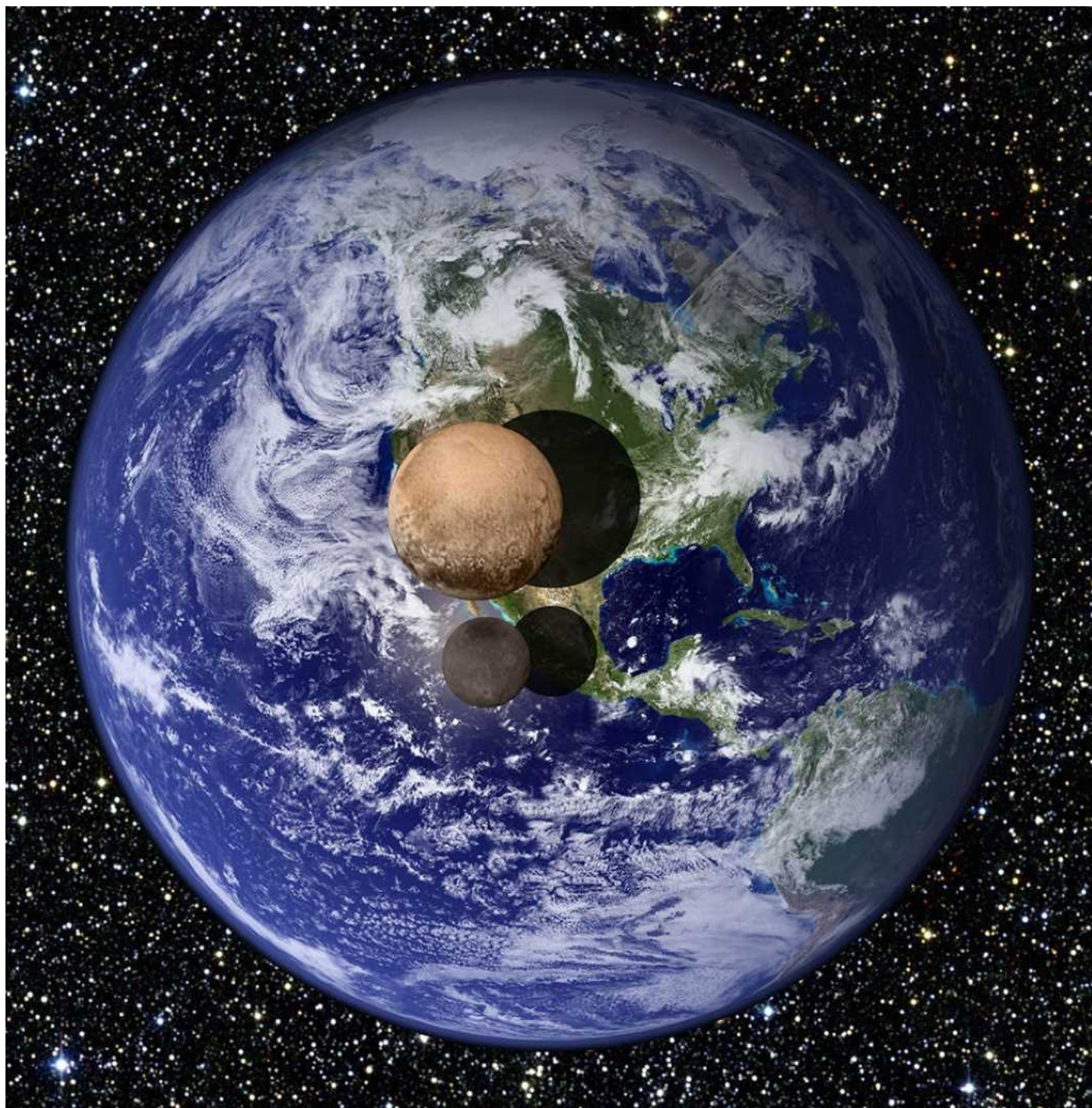
以下の画像は到達の少し前、地表からおよそ768,000km離れたところから冥王星を撮影したもの。画像ではクレーターや地表の様子を詳しく見ることができるが、なかでもハート型にも見える模様が目立つ。

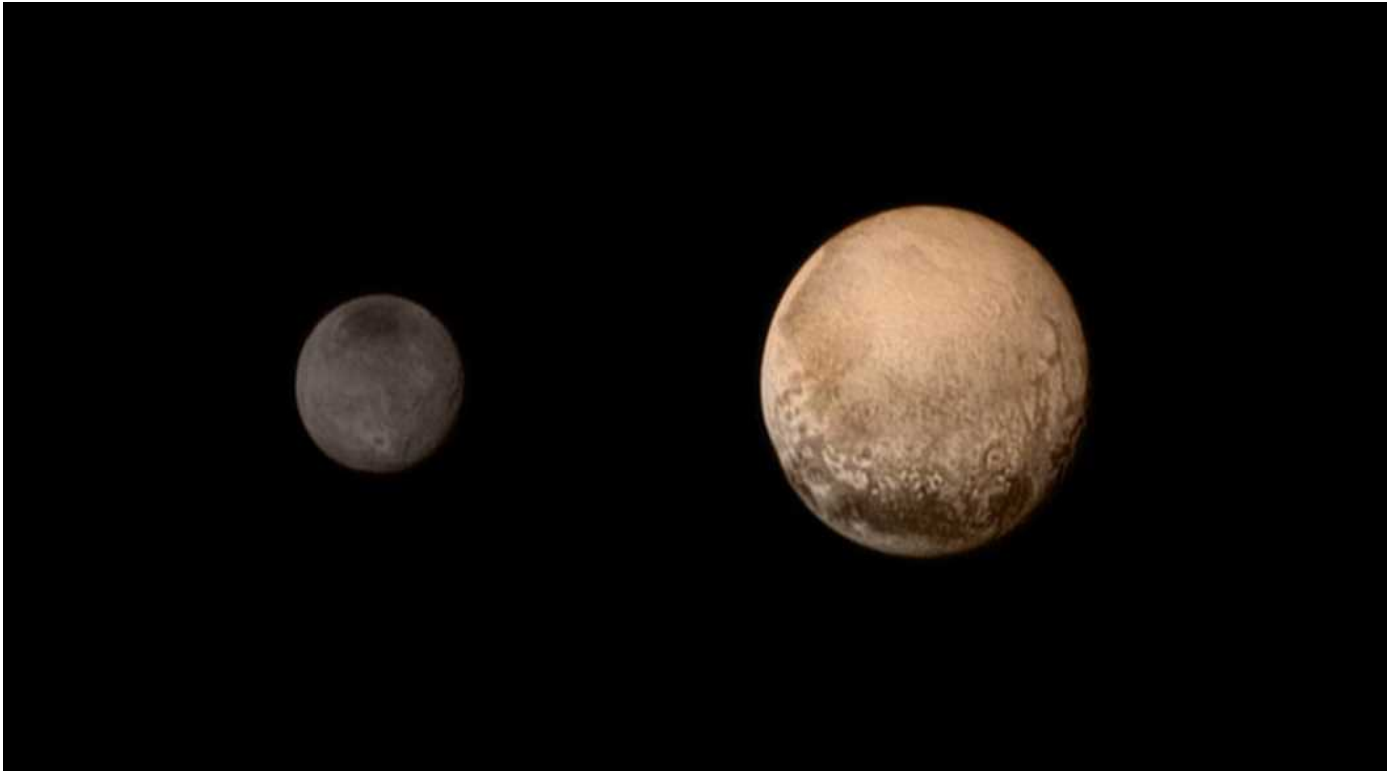


さらに、冥王星の近くにある衛星「カロンの」も同時に観測され、それらの大きさが具体的に判明した。冥王星の直径は約2,370 kmで、予想されていたサイズよりも少し大きかった。

NASAのwebサイトでは、それぞれの惑星を地球のサイズと対比した画像も公開されている。また、全体的に色がグレーであるカロンに対し、冥王星が赤っぽい色をしていることも新たに分かった要素のひとつだ。







じつはこれらの写真だけでも、とてもスゴイことなのだが、天体ファンならいざ知らず、一般的にはなかなか伝わりにくいかもしれない。実際、距離もあってか、詳しい観測データを地球へ送信するためには、16ヵ月ほど時間がかかるそうで、これらの写真は“前菜”のようなものだ。NASAの長官チャールズ・ボールデン氏は興奮気味にこう語っている。

「これから送信されてくるであろう、まだ見ぬ発見を楽しみに待つ。これは科学における歴史的な大勝利だ。我々は人類の可能性の限界値をまたひとつ上げることに成功した」

<http://tabi-labo.com/155302/pluto/>

END